

---

---

北大阪警察病院への頸動脈ステントの導入-自験 270 例のレビュー

山崎信吾、小林啓作、越前直樹

(北大阪警察病院 救急センター・脳神経外科)

---

人口の高齢化と診断機器の普及により、頸動脈病変を治療する機会が増加してきている。2008年4月に頸動脈ステント(CAS)が保険承認され、頸動脈内膜剥離術(CEA)に変わる手技として多くの施設で実施されてきている。2014年4月から当施設でも本格的にCASを導入している。演者は2000年から2013年の14年間に269件のCASを施行した。3ヶ月間以上のフォローを行ってきた。周術期の脳卒中は3.3%で、disable strokeは1.1%、死亡率0%であった。

平均28ヶ月のフォローアップで再治療は6例(2.2%)で必要となり、内2例は亜急性期の血栓もしくはプラーク内容の逸脱で、4例は中長期の再狭窄であった。術後2ヶ月目以降の中長期の脳卒中は2例で、1%/年であった。CASの治療成績については様々な結果が報告され、第一選択とすべきか否かは論議があるが、自験例のレビューではAHAのrecommendationに耐え得る結果であり、十分に頸動脈狭窄に対して第一選択の治療法となると考えられる。

また、急性内頸動脈閉塞に対する緊急CAS症例を動画で提示する。